

2021年(令和3年)度
A0 英語検定型入学試験[D日程] 問題
小 論 文

2021年3月16日 実施

【解答上の注意】 答えは別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》

地球環境問題のように全員が協力して取り組むべきグローバルな課題には、人類一般に普遍妥当な価値や規範を設けることが必要になってくる。まさに自然の内在的価値や権利の概念は、グローバルな課題に向き合う上で最適な価値規範である。しかし現実的には、自然の価値そのものは決して一つではありえない。たとえば自然科学で捉える「クジラ」と、生活や文化のなかでの「鯨」はそれぞれ異なる価値や意味をもち、鯨の価値でさえ地域や個人によって多様に存在する。ここに、普遍的価値を重視する立場(普遍主義)と、「人間にとっての自然の価値」を重視する立場(多元主義)の対比が生じてくることになる。多元主義は、生活や文化、地域によって本来多様である自然の価値が、近代において道具的価値に「矮小化」されてきたことを問題とし、人間の営みに醸成される自然の価値がもつ共生関係的な意義を再評価しようとする立場である。

とくに日本では多元主義の文脈で大きな成果があげられており、地域社会のローカルな「自然の価値」の分析をもとに、環境政策のあり方に影響を与えるボトムアップ式の環境倫理学の立ち上げが目指されてきた。たとえば鬼頭秀一は、生活の営みにおける自然との「かかわり」を示す概念に《生身》と《切り身》という語を導入し、環境問題の本質は「《生身》の自然が《切り身》化すること」、すなわち自然と人間の関係の切り離しに問題があると指摘した(鬼頭秀一『自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク』筑摩書房、1996年)。彼は、キリスト教を背景とする人間中心主義と、その克服をめざす自然中心主義とともに「人間／自然の二元論」であるとして棄却し、「生業」や「生活」における自然との「かかわり」に〈人間—自然〉の共生のヒントを探ろうとする。こうした立場は、自然支配的な人間中心主義を批判しつつも、「人間にとっての自然の価値」を重視する点では人間中心であるという意味で、いわば“批判的人間中心主義”といえるだろう。

しかし、今日の人間的スケールを超えた経済システムや、工場の機械的運動がもたらす大規模な環境破壊や動物虐待などの問題を前に、地域固有の道徳観念のようなバラバラの多元的価値や倫理がどれほどの意義をもつだろうか。すでにわれわれの「食」という営みも、フード・システムによって生産される《切り身》食品の消費そのものである。ここにローカルな価値を持ち出したところで、生命の商品化というシステムが内包している破壊性はどのように克服できるのだろうか。この点ではむしろ、すべての生命が等しくかけがえのない存在であるという考えや理念のほうが、人類全体で抗すべき問題を克服してゆく力をもっているだろう。だとすれば、自然とよい関係を取り結ぶためには「内在的価値」や「権利」、さらには「持続可能性」「生物多様性」といった普遍妥当でグローバルな価値を積極的に提起し、これらに基づく倫理的規範に従うべきだと言えそうである。

(尾関周二編『「環境を守る」とはどういうことか』より)

《問 題》

課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。

- (1) 「《生身》の自然が《切り身》化する」とはどういうことか、200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
- (2) 次の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。

問：「生命の商品化というシステムが内包している破壊性」とはどのようなものを説明した上で、これを克服するにはどうしたらいいか、課題文を手がかりに自身の考えを述べよ。